



## 1. ごあいさつ

私たち横浜市立大学消化器内科学教室は、2つの大学附属病院である金沢区福浦の附属病院と南区浦舟町の市民総合医療センター、および神奈川県を中心とした協力病院に勤務する170名を超える医師から構成されており、消化管・肝臓・胆膵領域の専門医が連携して診療に力を尽くしています。また、卒後5年以内の若い医師が多く、活気あふれた教室です。さらに、その出身大学は多彩であり、垣根のない教室運営がされていることも特徴です。

入門されると2018年度から開始された新専門医制度に沿ったプログラムにより、内科専門医を取得し、その後に消化器内科領域の専門医を目指していただきます。教室では、広い範囲で人材を募集しています。例えば世界に誇る大きなことを成し遂げたいと思う人、学位、専門医を欲しい人、内視鏡技術を身に付けたい人など、できる限り個人

を尊重し、一方で組織に所属する長所を十分に生かしながら、医師として過ごすことができる教室だと思います。国内留学や海外留学なども推奨しています。

臨床面においては消化管癌の内視鏡治療、肝臓癌の内科的治療、胆膵癌の集学的治療など国内でも有数の症例数と技術を誇り、若い教室員は経験豊富な指導者のもとでの研鑽を積むことができます。また研究面では基礎的・臨床的に世界にそのメッセージを発信できるような質の高い研究を目指しています。特に難治癌、難病の病態メカニズムの解明や新たな治療法の開発を行い、先進的医療の実現を目標としています。教室員のポテンシャルは非常に高く、また若い医師たちに広く活躍の場が準備されています。ぜひとも私たちの一員となって、横浜、神奈川から、日本の医療、医学の発展を目指しましょう。

主任教授 前田 慎

## 2. 横浜市立大学 消化器内科学教室について

横浜市立大学医学部の歴史は、明治4年に全国で2番目に開院された洋式病院を起源としています。これが、横浜共立病院、県立十全病院（明治7年）、市立十全病院を経て、今日の横浜市立大学医学部へと発展してきました。

本学の消化器内科領域は、以前は旧第2内科消化器グループ、旧第3内科消化器グループに分かれておりました。しかしながら、近年加速する医療の高度化に対応するため、消化器内科領域を一本化する措置がとられ、2009年に、2つの消化器グループが統合する形で、「消化器内科学教室」が設立しました。2010年に前田 慎 現主任教授が赴任し、現在では、横浜市立大学附属病院、横浜市立大学附属市民総合医療センターの2大学病院を中心に神奈川県内外の多くの関連施設で160名を超える教室員が診療、研究、教育を精力的に行っています。

### 3. 内科専門医取得プログラム

2018年度4月より、新内科専門医制度が開始されました。大学では、附属病院を基幹病院とする“横浜市立大学内科専門医育成プログラムF”とセンター病院を基幹病院とする“横浜市立大学内科専門医育成プログラムC”が開始され、各科が関連施設と連携し、3年間の研修プログラムを組んでいます。その1つの特徴として、サブスペシャリティ研修を主としたプログラムと言えます。当教室でも多くの施設と連携し、卒後3年目から消化器領域を中心とした研修が行われ、内科専門医と並行して早期に消化器専門医資格取得も目指しています。また、もう1つの特徴として、下記のように大学2病院以外に関連7施設が専門研修プログラムを有する基幹病院登録されていることです。このことにより、2大学病院を中心としたさまざまな組み合わせで研修をすることが可能となっています。

ただ、このためには各内科診療科が充実した施設である点が重要になって来ます。当教室では、神奈川県内の一般病床数上位20施設のうち6施設を関連施設としていることに加え、他の関連施設におけるプログラムにもさまざまな特徴があり、皆様にもこれらの教育施設から幅広い領域の豊富な症例数を研修していただくことができます。また前述の6施設を中心に、消化器内科部長を教室所属医師が担当しており、消化器内科スタッフのうち多数を教室員が占める形で派遣しています。そのため内科専攻医として皆様が過ごす3年間で、効率よく内科専門医を取得するとともに、消化器内科医として必要な検査・治療処置などを経験できるよう、教室員全体でバックアップすることが可能です。また、研修期間中に研修先を異動する際にも、各内科領域の経験症例数や消化器内科医としての習熟度、希望する研修内容について、各部長や教室員が情報を共有する事により、計画的な研修が可能となります。

横浜市立大学内科専門医育成プログラム F（附属病院）

横浜市立大学内科専門医育成プログラム C（センター病院）

国家公務員共済組合連合会横浜南共済病院内科専門医研修プログラム

済生会横浜市南部病院内科専門研修プログラム

藤沢市民病院内科専門研修プログラム

大和市立病院内科専門研修プログラム

横須賀市立市民病院内科専門研修プログラム

神奈川県立病院機構内科専門研修プログラム

大森赤十字病院内科専門研修プログラム

#### 今年度専攻医登録プログラム

プログラム名	専攻医数
横浜市立大学内科専門医育成プログラムF	0
横浜市立大学内科専門医育成プログラムC	6
横浜南共済病院内科専門研修プログラム	5
横浜市南部病院内科専門研修プログラム	4
藤沢市民病院内科専門研修プログラム	5
横浜市民病院機構内科専門研修プログラム	3
神奈川県立病院機構内科専門研修プログラム	2
大和市立病院内科専門研修プログラム	3
横須賀市民病院内科専門研修プログラム	2
関東中央病院内科専攻医研修プログラム	1
三井記念病院内科専攻医研修プログラム	1
大森赤十字病院内科専攻医研修プログラム	1

#### 4. 豊富な専門教育機関

消化器内科医を志す皆様に、入門する教室を選ぶ上で最も重視して欲しい点は、消化器内科領域の研究や専門的治療を学ぶ機会がどの程度選択できるかという点です。当教室では、横浜市大附属病院、横浜市大附属市民総合医療センター、神奈川県立がんセンターという3つの専門機関を中心に、様々な形で消化器内科医としてレベルアップする機会を提供する事ができます。

消化器内科の専門領域は、大別すると、消化管領域、肝臓領域、胆膵領域に分かれており、それぞれ高度な治療処置や薬物療法の進歩が目覚ましい分野です。当教室に入門し、内科専門医を取得した後は、原則として個々の希望に応じて、これらの専門領域を習得し、学位取得を目指す事が可能です。

横浜市大附属病院では、すべての領域の疾患を担当医として全員で診療にあたることで領域の垣根を超えた診療をしつつ、専門家 (specialist) のもとで自身が興味を持つ

ている専門領域の勉強を進めていけます。また前田教授の指導のもと消化器関連の基礎研究を行っており、関連施設を含めた多施設共同試験を始めとした臨床研究も行っております。

横浜市大附属市民総合医療センターは、県下有数の診療実績を誇っており、消化器病センターの医師全員が当教室に所属しております。消化器病センターでは消化管・肝臓・胆膵の3領域に分かれて、高度な診療や臨床研究を行っております（年間件数(2022年度)：ESD 639件（食道99、胃282、十二指腸16、大腸242）、LECS 2件、EFTR 19件、angiography 50件(TACE 32件、TAI 18件)、RFA 98件、ERCP 517件、EUS 762件（うちEUS-FNA 134件、EUS下ドレナージ 35件））。

神奈川県立がんセンターでは、肝胆膵・消化管の各領域に分かれて、内視鏡治療や多数の臨床試験（化学療法）を始めとした最新のがん診療を中心に学ぶ事ができます。

当教室では、これらの研修を経て、横浜、神奈川の消化器診療の向上に寄与し、国内外に最新の知見を発信していく医師を育成することを目指しています。

## 5. 地域医療を担う人材の育成

今後訪れる超高齢化社会を迎えるにあたり、消化器内科の医師は専門家(specialist)や研究者(scientist)としてだけでなく、総合医(generalist)としての振る舞いも要求されており、現在の専門医制度もこれを色濃く反映した内容となっております。当教室の関連病院には消化器内科としてだけでなく内科医としての成長を促す中規模市中病院も充実しており、これらの病院では消化器内科部長はもちろん、管理職にも当教室の医局員が多く関わり、地域医療に貢献しています（秦野赤十字病院：田中院長、足柄上病院：加藤副院長、横須賀市民病院：小松副院長、横浜市南部病院：川名副院長、横浜掖済会病院：内藤院長、横浜南共済病院：近藤部長、大森赤十字病院：井田部長、保土ヶ谷中央病院：桑島部長、以上2023年4月時点）。当教室では専門機関、大規模市中病院、中規模市中病院が互いに連携し、後期研修期間を含めて様々な医療機関で研修を行っていただくことによって、現在地域から求められている「形だけでなく真の意味での内科専門医、消化器内科専門医」を育成します。

## 6. 個人のニーズに合わせたキャリアプランの提供

若い先生方は目の前にある興味や勤務先に関心が向かいがちですが、医師としての生活は数十年にも及びます。生きていく中で様々なイベント（結婚、出産、病気など）が起こりうるため、長きにわたるシームレスなキャリアプランの提供は所属する教室員にとって極めて重要であると考えています。当教室では内科専門医、消化器領域の各種専門医の取得、そして学位取得を基本としますが、その後のキャリアプランについても積極的に対応していきます。具体的には、大学における学術活動の継続、国内外留学、地域基幹病院への就職、開業への準備などですが、各個人の方向性を尊重し、その希望に応じたプランの提供が上記に述べたような人材や関連施設などにより可能です。また当教室には47名の女性医師が所属しておりますが（2023年4月現在）、当教室ではワーキンググループを立ち上げ女性の妊娠・出産、育児に対しても柔軟に対応できるように、また働き方改革が求められる時代の変遷に応じつつも消化器内科医としてのキャリアを継続できるようにすべく教室をあげて力を入れております。（産休・育休後に復帰された先生は現在10名ほどおられます。）

## 7. 伝統と若さに支えられた教室

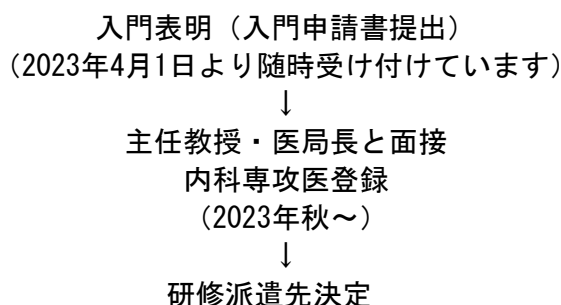
当教室が存立する背景には、これまで横浜市大の関連施設で消化器内科の発展に携わってきた多くの先生方の存在があります。現在、旧第2内科、旧第3内科、消化器内科学教室のいずれかに所属していた先生を中心として、「消化器内科学教室同門会」が形成されており、143名の同門会員が所属しております。長倉靖彦同門会会長（現横浜掖済会病院名誉院長）を中心に毎年総会を開催し、多くの新旧教室員にご参加頂き、地元神奈川での診療や開業を志す医師にとって、大きな支えとなっております。

また、当教室では、卒後20年以上のベテラン医師（31名）、卒後10-20年の中堅医師（57名）、卒後10年未満の若手医師（84名）がバランスよく所属する事により、充実した診療、教育を可能としています。特に皆様の直近の先輩となる卒後3-6年目の若手医師は、現在50名ほどが各関連施設で切磋琢磨しながら消化器内科医としての道を歩んでおります。これら学年の近い若手医師は、皆様の良き手本かつ相談相手になってくれる頼れる存在です。

また、当教室では教室の運営や人事について、大学からのトップダウンの形ではなく、各関連施設の部長を中心とした「運営委員会」での話し合いにより決定しています。皆様が消化器内科医として目指すべきものが見つかった時、または医師として様々な形で壁にぶつかったときには、各施設の上司だけではなく、教授以下運営委員会を始めとする教室員が協力して、対応させていただきます。

## 8. 入門までの流れ

当教室への入門を希望される先生は、運営委員会事務局（連絡先は、最終ページに記載してあります）までご連絡ください。入門に必要な書類をお送り致しますのでご提出ください。



## 9. 後期研修途中あるいは、後期研修終了後の入門をお考えの皆様

消化器内科医として、市中病院等で研修中の皆様は、日々、幅広い疾患や治療手技を学んでいらっしゃる事と思います。そんな皆様の中には、後期研修終了後のステップアップとして、「臨床で一つの分野を極めたい！」「臨床研究で学位を取得したい！」「基礎研究を一から学んでみたい！」というご希望をお持ちの方も多いのではないのでしょうか。

当教室では、附属病院の基礎研究と臨床研究、市民総合医療センターの消化管・肝胆膵グループにおける専門的治療と臨床研究、神奈川県立がんセンターの消化管・肝胆

藤各グループにおける最先端のがん診療といった形で、専門教育を受ける事が可能です。また、消化器内科にとらわれず、内科全般を研修したい方には、県内の関連施設で総合診療と一体となった診療を経験することもできます。

以下の紹介文にもあるように、他大学、教室外の施設から来た先生も「横浜市立大学消化器内科学教室の一員」として、責任ある立場で数多く活躍しております。

消化器内科医としての更なるレベルアップのために、内科医としての守備範囲を広げるために、当教室は多くの選択肢をご用意できますので、ぜひお気軽に施設見学や教室説明会にお越しください。



## 10. 業績紹介

### 原著論文：47本（2022年度）

1. Asama H, Ueno M, Kobayashi S, Fukushima T, Kawano K, Sano Y, Tanaka S, Nagashima S, Morimoto M, Ohira H, Maeda S: Sarcopenia: Prognostic Value for Unresectable Pancreatic Ductal Adenocarcinoma Patients Treated With Gemcitabine Plus Nab-Paclitaxel. *Pancreas*, **1**:51(2):148-152, 2022.
2. Azuma D, Kunisaki R, Yukawa T, Yaguchi K, Watanabe M, Shibui S, Nakamori Y, Toyoda J, Tanabe M, Maeda K, Inayama Y, Kimura H, Maeda S: Fulminant Amebic Enteritis in the Perinatal Period: A Case Report. *Intern Med*, **10**. 2169/internalmedicine.0839-22, 2022.
3. Azemoto N, Ueno M, Yanagimoto H, Mizuno N, Kawamoto Y, Maruki Y, Watanabe K, Suzuki R, Kaneko J, Hisada Y, Sato H, Kobayashi S, Miyata H, Furukawa M, Mizukami T, Miwa H, Ohno Y, Tsuji K, Tsujimoto A, Nagano H, Okuyama H, Asagi A, Okano N, Ishii H, Morizane C, Ikeda M, Furuse J: Endoscopic duodenal stent placement versus gastrojejunostomy for unresectable pancreatic cancer patients with duodenal stenosis before introduction of initial chemotherapy (GASPACHO study): a multicenter retrospective study. *Jpn J Clin Oncol*, **52**(2):134-142, 2022.
4. Atsukawa M, Tsubota A, Kondo C, Toyoda H, Nakamuta M, Takaguchi K, Watanabe T, Hiraoka A, Uojima H, Ishikawa T, Iwasa M, Tada T, Nozaki A, Chuma M, Fukunishi S, Asano T, Ogawa C, Abe H, Kato K, Hotta N, Shima T, Matsuura K, Mikami S, Tachi Y, Fujioka S, Okubo H, Shimada N, Tani J, Morishita A, Hidaka I, Moriya A, Tsuji K, Akahane T, Okubo T, Arai T, Kitamura M, Morita K, Kawata K, Tanaka Y, Kumada T, Iwakiri K: KTK49 Liver Study Group: Time-course changes in liver functional reserve after successful sofosbuvir/velpatasvir treatment in patients with decompensated cirrhosis. *Hepatol Res*, **52**(3):235-246, 2022.
5. Chuma M, Uojima H, Hattori N, Arase Y, Fukushima T, Hirose S, Kobayashi S, Ueno M, Tezuka S, Iwasaki S, Wada N, Kubota K, Tsuruya K, Shimma Y, Hiroki I, Takuya E, Tokoro C, Iwase S, Miura Y, Moriya S, Watanabe T, Hidaka H, Morimoto M, Numata K, Kusano C, Kagawa T, Maeda S: Safety and efficacy of atezolizumab plus bevacizumab in patients with unresectable hepatocellular carcinoma in early clinical practice: A multicenter analysis. *Hepatol Res*, **52**(3):269-280, 2022.
6. Chuma M, Yokoo H, Hiraoka A, Ueda K, Yokoyama T, Tsuji K, Shimada N, Uojima H, Kobayashi S, Hattori N, Okubo T, Atsukawa M, Ishikawa T, Takaguchi K, Tsutsui A, Toyoda H, Tada T, Saito Y, Hirose S, Tanaka T, Takeda K, Otani M, Sekikawa Z, Watanabe T, Hidaka H, Morimoto M, Numata K, Kagawa T, Sakamoto M, Kumada T, Maeda S: Identification of CT Values That Could Be Predictive of Necrosis (N-CTav) in Hepatocellular Carcinoma after Lenvatinib Treatment. *Curr Oncol*, **29**(5):3259-3271, 2022.
7. Fukushima T, Morimoto M, Ueno M, Kubota K, Uojima H, Hidaka H, Chuma M, Numata K, Tsuruya K, Hirose S, Kagawa T, Hattori N, Watanabe T, Matsunaga K, Yamamoto K, Tanaka K, Maeda S: Comparative study between sorafenib and lenvatinib as the first-line therapy in the sequential treatment of unresectable hepatocellular carcinoma in a real-world setting. *JGH Open*, **17**:6(1):29-35, 2022.
8. Hamanaka J, Vadalà di Prampero SF, Solito S, Bulajic M, Picci A, Panic N, Battista S, Barbaro F, Maeda S, Costamagna G: Efficacy and Safety of a Novel Triple-anchoring Technique for Colonic Hybrid Endoscopic Mucosal Resection: A Case Series. *J Gastrointest Liver Dis*, **19**:31(1):25-30, 2022.
9. He X, Hikiba Y, Suzuki Y, Nakamori Y, Kanemaru Y, Sugimori M, Sato T, Nozaki A, Chuma M, Maeda S: EGFR inhibition reverses resistance to lenvatinib in hepatocellular carcinoma cells: *Sci Rep*, **12**(1):8007, 2022.
10. Inokuchi Y, Watanabe M, Hayashi K, Kaneta Y, Furuta M, Machida N, Maeda S: A case of esophageal granular cell tumor diagnosed by mucosal incision-assisted biopsy. *Clin J Gastroenterol*, **15**(1):53-58, 2022.
11. Inokuchi Y, Ishida A, Hayashi K, Kaneta Y, Watanabe H, Kano K, Furuta M, Takahashi K, Fujikawa H, Yamada T, Yamamoto K, Machida N, Ogata T, Oshima T, Maeda S: Feasibility of gastric endoscopic submucosal dissection in elderly patients aged  $\geq 80$  years. *World J Gastrointest Endosc*, **16**:14(1):49-62, 2022.
12. Inokuchi Y, Hayashi K, Kaneta Y, Okubo Y, Watanabe M, Furuta M, Machida N, Maeda S: Endoscopic mucosal resection using a ligation device for duodenal neuroendocrine tumors: a simple method. *Ther Adv Gastrointest Endosc*, **9**:15:26317745221103735, 2022.
13. Inokuchi Y, Washimi K, Watanabe M, Hayashi K, Kaneta Y, Furuta M, Machida N, Maeda S: Successful resection of gastric cancer arising from a heterotopic gastric gland in the submucosa by endoscopic submucosal dissection. *Clin Case Rep*, **10**(6):e5981, 2022.
14. Ishii T, Kaneko T, Suzuki Y, Nishimura M, Sugimori K, Kawana I, Maeda S: Salvage technique for endoscopic stent

- removal using a thin-tipped balloon catheter during endoscopic ultrasound-guided hepaticoduodenostomy. *Endoscopy*, **10**:1055/a-1694-3617, 2022.
15. Ishii T, Ueda M, Maeda S: Novel approach to complete anastomotic obstruction after hepaticojejunostomy. *Dig Endosc*, **34**(3):e54-e55, 2022.
  16. Ikeda R, Hirasawa K, Ozeki Y, Sawada A, Nishio M, Fukuchi T, Sato C, Maeda S: Cervical esophageal adenocarcinoma of intestinal type in ectopic gastric mucosa. *Case Reports DEN open*, **3**(1):e141, 2022.
  17. Iijima T, Obata S, Chuma M, Miyagi E, Aoki S: Rapid progression of hepatocellular carcinoma in a pregnant woman: A case report. *Clin Case Rep*, **10**(11):e6558, 2022.
  18. Kawakami A, Tanaka M, Choong LM, Kunisaki R, Maeda S, Bjarnason I, Hayee B: Self-Reported Medication Adherence Among Patients with Ulcerative Colitis in Japan and the United Kingdom: A Secondary Analysis for Cross-Cultural Comparison. *Patient Prefer Adherence*, **8**:16:671-678, 2022.
  19. Kawakami A, Tanaka M, Sakagami K, Choong LM, Kunisaki R, Maeda S, Bjarnason I, Ito H, Hayee B: Daily life difficulties among patients with ulcerative colitis in Japan and the United Kingdom: A comparative study. *Medicine (Baltimore)*, **101**(35):e30216, 2022.
  20. Kobayashi S, Fukushima T, Ueno M, Moriya S, Chuma M, Numata K, Tsuruya K, Hirose S, Kagawa T, Hattori N, Watanabe T, Matsunaga K, Suzuki M, Uojima H, Hidaka H, Kusano C, Suzuki M, Morimoto M: A Prospective Observational Cohort Study of Lenvatinib as Initial Treatment in Patients with BCLC-Defined Stage B Hepatocellular Carcinoma. *BMC cancer*, **22**(1):517, 2022.
  21. Kobayashi S, Suzuki M, Ueno M, Maruki Y, Okano N, Todaka A, Ozaka M, Tsuji K, Shioji K, Doi K, Kojima Y, Tsumura H, Tanaka K, Higuchi H, Kawabe K, Imaoka H, Yamashita T, Miwa H, Nagano H, Arima S, Hayashi H, Naganuma A, Yamaguchi H, Hisano T, Umemoto K, Ishii S, Nakashima K, Suzuki R, Kitano Y, Misumi T, Furuse J, Ishii H: Comparing the Efficacy and Safety of Gemcitabine plus Nab-Paclitaxel versus Gemcitabine Alone in Older Adults with Unresectable Pancreatic Cancer. *Oncologist*, **27**(10):e774-e782, 2022.
  22. Kawamura A, Uojima H, Chuma M, Shao X, Hidaka H, Nakazawa T, Take A, Sakaguchi Y, Numata K, Kako M, Nozaki A, Azuma S, Horio K, Kusano C, Atsuda K: The change rate in serum nitric oxide may affect lenvatinib therapy in hepatocellular carcinoma. *BMC Cancer*, **22**(1):912, 2022.
  23. Miwa H, Sugimori K, Tsuchiya H, Sugimori M, Nishimura M, Tozuka Y, Komiyama S, Sato T, Kaneko T, Numata K, Maeda S: Novel clip device for prevention of bleeding after endoscopic papillectomy. *DEN Open*, **29**:2(1):e51, 2022.
  24. Matsuyama M, Koizumi N, Otsuka A, Kobayashi K, Yagasaki S, Watanabe Y, Zhou J, Nishiyama Y, Matsumoto N, Tsukihara H, Numata K: A novel complementation method of an acoustic shadow region utilizing a convolutional neural network for ultrasound-guided therapy. *Int J Comput Assist Radiol Surg*, **17**(1):107-119, 2022.
  25. Nishio M, Hirasawa K, Ozeki Y, Sawada A, Ikeda R, Fukuchi T, Kobayashi R, Sato C, Ogashiwa T, Inayama Y, Kunisaki R, Maeda S: Magnifying endoscopy is useful for tumor border diagnosis in ulcerative colitis patients. *Dig Liver Dis*, **54**(6):812-818, 2022.
  26. Numata K, Wang F: New developments in ablation therapy for hepatocellular carcinoma: combination with systemic therapy and radiotherapy. *Hepatobiliary Surg Nutr*, **11**(5):766-769, 2022.
  27. Ozeki Y, Hirasawa K, Sawada A, Ikeda R, Nishio M, Fukuchi T, Kobayashi R, Sato C, Maeda S: Learning curve analysis for duodenal endoscopic submucosal dissection: a single-operator experience. *J Gastroenterol Hepatol*, **37**(11):2131-2137, 2022.
  28. Ogushi K, Chuma M, Numata K, Nozaki A, Moriya S, Uojima H, Kondo M, Morimoto M, Maeda S: Impact of psoas muscle index assessed by a simple measurement method on tolerability and duration of continued treatment with sorafenib in hepatocellular carcinoma patients. *Eur J Gastroenterol Hepatol*, **34**(7):774-781, 2022.
  29. Okada M, Numata K, Nihonmatsu H, Tomita K, Takeda A, Hyodo T, Eriguchi T, Nakano M: Pathological appearance of focal liver reactions after stereotactic body radiotherapy for hepatocellular carcinoma. *Diagnostics (Basel)*, **12**(5):1072, 2022.
  30. Omoto S, Kitano M, Fukasawa M, Ashida R, Kato H, Shiomi H, Sugimori K, Kanno A, Chiba Y, Takano S, Yamamoto N, Ezaki T, Miwa H, Yokomura A, Hoshikawa M, Tanaka T, Kudo M: Tissue harmonic versus contrast-enhanced harmonic endoscopic ultrasonography for the diagnosis of pancreatic tumors: Prospective multicenter study. *Dig Endosc*, **34**(1):198-206, 2022.
  31. Sue S, Kondo M, Sato T, Oka H, Sanga K, Ogashiwa T, Matsubayashi M, Kaneko H, Irie K, Maeda S: Vonoprazan and

high-dose amoxicillin dual therapy for *Helicobacter pylori* first-line eradication: A single-arm, interventional study. *JGH Open*, **7**(1):55–60, 2022.

32. Shichijo S, Takeuchi Y, Shimodate Y, Yamashina T, Yamasaki T, Hayashi T, Hirasawa K, Fukunaga S, Yamaguchi S, Asai S, Kawamura T, Fukata N, Yamamoto M, Teramoto A, Kinjo Y, Matsuno K, Kinjo T, Sano Y, Iwatsubo T, Nagaie K, Matsumoto M, Hoki N, Kawamura I, Shimokawa T, Uedo N, Ishikawa H, Tanaka K, Kitano M; Kansai Endoscopic Device Selection Conference in Kansai Research Group: Performance of perioperative antibiotics against post-endoscopic submucosal dissection coagulation syndrome: a multicenter randomized controlled trial. *Gastrointest Endosc*, **95**(2):349–359, 2022.
33. Tezuka S, Ueno M, Oishi R, Nagashima S, Sano Y, Kawano K, Tanaka S, Fukushima T, Asama H, Konno N, Kobayashi S, Morimoto M, Maeda S: Modified FOLFIRINOX versus sequential chemotherapy (FOLFIRI/FOLFOX) as a second-line treatment regimen for unresectable pancreatic cancer: A real-world analysis. *Cancer Med*, **1**(4):1088–1098, 2022.
34. Tezuka S, Ueno M, Kobayashi S, Hamaguchi T, Yamachika Y, Oishi R, Nagashima S, Fukushima T, Morimoto M, Maeda S: Nal-IRI/5-FU/LV versus modified FOLFIRINOX and FOLFIRI as second-line chemotherapy for unresectable pancreatic cancer: A single center retrospective study. *Pancreatol*, **22**(6):789–796, 2022.
35. Tezuka S, Ueno M, Kobayashi S, Fukushima T, Nasu R, Washimi K, Yamamoto N, Morinaga S, Morimoto M, Maeda S: A case of pancreatic mucinous cystadenocarcinoma with malignant ascites without recurrence for more than 8 years after surgery. *Case Reports Clin J Gastroenterol*, **15**(4):834–839, 2022.
36. Tozuka Y, Ueno M, Kobayashi S, Morimoto M, Fukushima T, Sano Y, Kawano K, Hanaoka A, Tezuka S, Asama H, Moriya S, Morinaga S, Ohkawa S, Maeda S: Prognostic significance of sarcopenia as determined by bioelectrical impedance analysis in patients with advanced pancreatic cancer receiving gemcitabine plus nab-paclitaxel: A retrospective study. *Oncol Lett*, **24**(4):375, 2022.
37. Toyoda H, Yasuda S, Moriya A, Itobayashi E, Uojima H, Watanabe T, Atsukawa M, Arai T, Ishikawa T, Mikami S, Hiraoka A, Tsuji K, Oikawa T, Tsubota A, Nozaki A, Chuma M, Abe H, Shima T, Kumada T, Tanaka J: Misunderstanding of hepatitis C virus (HCV) infection status by non-specialized medical doctors in patients who achieved sustained virologic response to anti-HCV therapy. *J Infect Chemother*, **28**(9):1231–1234, 2022.
38. Takimoto K, Matsuura N, Nakano Y, Tsuji Y, Takizawa K, Morita Y, Nagami Y, Hirasawa K, Araki H, Yamaguchi N, Aoyagi H, Matsuhashi T, Iizuka T, Saegusa H, Yamazaki K, Hori S, Mannami T, Hanaoka N, Mori H, Kobara H, Takeuchi Y, Ono H; Polyglycolic Acid Study Group: Efficacy of polyglycolic acid sheeting with fibrin glue for perforations related to gastrointestinal endoscopic procedures: a multicenter retrospective cohort study. *Surg Endosc*, **36**(7):5084–5093, 2022.
39. Takeda Y, Kobayashi N, Kessoku T, Okubo N, Suzuki A, Tokuhisa M, Miwa H, Udaka N, Ichikawa Y: Case reports: chemoradiotherapy for locally advanced neuroendocrine carcinoma of the gallbladder. *Clin J Gastroenterol*, **15**(4):803–808, 2022.
40. Tsuji K, Tsujimoto A, Nagano H, Okuyama H, Asagi A, Okano N, Ishii H, Morizane C, Ikeda M, Furuse J: Endoscopic duodenal stent placement versus gastrojejunostomy for unresectable pancreatic cancer patients with duodenal stenosis before introduction of initial chemotherapy (GASPACHO study): a multicenter retrospective study. *Jpn J Clin Oncol*, **52**(2):134–142, 2022.
41. Ueno M, Sugimori K, Taguri M, Ohkawa S, Kobayashi S, Miwa H, Kaneko T, Morimoto M, Yamanaka T: Randomized Phase II Study of Gemcitabine Monotherapy vs. Gemcitabine with an EPA-Enriched Oral Supplement in Advanced Pancreatic Cancer. *Nutrition and Cancer*, **74**(1): 123–130, 2022.
42. Wang F, Numata K, Komiyama S, Miwa H, Sugimori K, Ogushi K, Moriya S, Nozaki A, Chuma M, Ruan L, Maeda S: Combination Therapy With Lenvatinib and Radiofrequency Ablation for Patients With Intermediate-Stage Hepatocellular Carcinoma Beyond Up-To-Seven Criteria and Child-Pugh Class A Liver function: A Pilot Study. *Front Oncol*, **12**:843680, 2022.
43. Wang F, Numata K, Nihonmatsu H, Chuma M, Ideno N, Nozaki A, Ogushi K, Tanabe M, Okada M, Luo W, Nakano M, Otani M, Inayama Y, Maeda S: Added Value of Ultrasound-Based Multimodal Imaging to Diagnose Hepatic Sclerosed Hemangioma before Biopsy and Resection. *Case Reports Diagnostics (Basel)*, **11**:2818, 2022.
44. Yamada H, Kaneko H, Kuwashima H, Sugimori M, Tsuyuki S, Sanga K, Irie K, Sasaki T, Kondo M, Miyake A, Maeda S: The Origin of Epithelium with Low-Grade Atypia in Early Gastric Cancer. *Digestion*, **103**(3):217–223, 2022.
45. Yaguchi K, Matsune Y, Kunisaki R, Araki K, Kimura H, Inayama Y, Kumagai J, Maeda S: Progression of ulcerative colitis following diversion colitis. *Clin J Gastroenterol*. **10**.1007/s12328-022-01696-4, 2022.
46. Yoshida Y, Kobayashi S, Ueno M, Morizane C, Tsuji K, Maruki Y, Mori K, Watanabe K, Ohba A, Furuta M, Todaka A,

Tsujimoto A, Ozaka M, Okano N, Yane K, Umemoto K, Kawamoto Y, Terashima T, Tsumura H, Doi K, Shioji K, Asagi A, Kojima Y, Suzuki E, Toshiyama R, Furukawa M, Naganuma A, Suzuki R, Miwa H, Ikeda M, Furuse J: Efficacy of chemotherapy for patients with metastatic or recurrent pancreatic adenosquamous carcinoma: A multicenter retrospective analysis. *Pancreatol*, **22**(8):1159-1166, 2022.

47. Yoshida M, Takizawa K, Hasuiki N, Ono H, Boku N, Kadota T, Mizusawa J, Oda I, Yoshida N, Horiuchi Y, Hirasawa K, Morita Y, Yamamoto Y, Muto M; Gastrointestinal Endoscopy Group of the Japan Clinical Oncology Group: Second gastric cancer after curative endoscopic resection of differentiated-type early gastric cancer: post-hoc analysis of a single-arm confirmatory trial. *Gastrointest Endosc*, **95**(4):650-659, 2022.

その他国内外学会発表、和文論文など多数

## 11. 関連施設からのメッセージ



### 【附属病院】

消化器内科 入江 邦泰

附属病院では、前田教授を中心に臨床診療、臨床・基礎研究、医学教育を行っています。

臨床診療では、特定機能病院および高度型地域がん診療連携拠点病院としての役割を有しているため、川崎、横浜、横須賀・三浦、湘南地区からご紹介をいただいた症例を中心に、common disease からがん診療や希少疾患まで様々な診療を行っており、消化器内科領域以外の希少疾患に対して消化器内科医としてサポートさせていただく機会も多く、大学ならではの多様な経験を積むことが可能です。

大学病院では、消化管、肝・胆膵、IBD 診療などグループ毎に分かれての診療を行っている病院が多いですが、当院ではそれぞれのサブスペシャリティを有した医師がすべての入院患者を共同で診療にあたっています。カンファレンスなども共同で行っているため、診療に関して各分野からの専門的な意見を聞くことができ、消化器内科領域において幅広い経験が積むことやプレゼンテーション能力の向上も可能です。薬物療法を施行する

がん診療や IBD 診療においても、症例を多く経験することが可能です。がん診療では、診断から ESD や ERCP による内視鏡的治療、全身化学療法などの積極的加療、終末期における緩和治療まで幅広く診療する機会があり、IBD 診療では発症時の診断からステロイド、免疫抑制剤、生物学的製剤による寛解導入まで一貫してグループとして診療しており、患者の状態やニーズに柔軟に対応できる様な診療を心がけて行っています。

検査・手技では、消化管領域における内視鏡診断や ESD、EMR、LECS を中心とした内視鏡的治療、胆膵領域における ERCP、EUS、AUS、肝領域における TACE や RFA、IBD における小腸カプセル内視鏡、バルーン内視鏡を用いた検査を行っており、サブスペシャリティを有した医師が専門性の高い治療を行っております。また、trainee の先生方も少人数であるため、各指導医が集中して指導を行うことで手技獲得や読影ができるような指導体制をとって対応しております。

研究に関しては臨床研究のみならず、基礎研究にも力を入れています。前田教授からの直接指導を受けることも可能であり、国内・国際学会での発表や論文発表を積極的に行っております。また、次世代臨床研究センター（Y-NEXT）という臨床研究専門部署に所属し、大学全体の研究を推進している医師も所属しており、臨床研究の開始を最初から最後までサポートできる体制にあります。また、大学病院として働き方改革を進めており、その一環として臨床診療だけでなく、研究を中心とした仕事をしていくなど消化器内科医としての diversity を考慮した、様々な希望に応じた医師としての life plan をサポートしていきたいと考えています。

医学教育に関して、附属病院は教育機関としても重要な役割を果たしております。医学生や初期臨床研修医の教育、指導を行い、学会、地方会での発表も積極的に行っています。また、当科では医学教育をサブスペシャリティとして活躍している医師もおり、臨床医や研究医らと協力しながら、教育者として、医師として多様な活躍の場を創出しております。

#### 【附属市民総合医療センター】

#### 消化器病センター内科部長 沼田 和司

消化器病センター内科は一か月間の入退院数は 160-200 名で、早期胃癌、早期十二指腸癌、早期食道癌、早期大腸癌の内視鏡診断、内視鏡治療、膵炎や総胆管結石等の良性疾患、胆膵癌の超音波、超音波内視鏡、ERCP 等の画像診断と抗がん剤、ステント挿入等の治療、肝炎の診断、治療、早期肝癌から進行肝癌の造影超音波、EOB-MRI との融合画像での診断から治療（RFA、TACE、薬物治療等の国際共同臨床試験）を行う職人集団です。上記全疾患の臨床研究、工学系との共同研究等を元に学会発表、論文投稿を積極的に行っています。さらには内視鏡、超音波の勉強に海外からの短期・長期留学生が技術取得や研究論文記載のために来ており、実際に当院からの論文数は増えております。後期研修終了後、内科専門医取得後の消化器専門研修として、幅広く高度な消化器内科診療を習得することが可能です。ぜひ当教室に入門して一緒に仕事をして体験してください。絶対損はしません。

【藤沢市民病院】  
消化器内科 福地 剛英

2021 年に開院 50 周年を迎えた当院は、湘南の中心地である藤沢市に位置し、湘南地域の基幹病院として地域医療を支えています。  
病床数は 536 床で、医師数・診療科も非常に多く活気に満ちており、各科の垣根が非常に低く連携がとても良いことが特徴です。

藤沢市民病院 消化器内科のこれまでの歴史の中で、岩瀬滋 部長（2023 年 4 月副院長就任）の指導のもと《先輩を超えるのは最低ライン、高卒ルーキーで 4 番エース》をモットーに若手を中心に日々切磋琢磨して診療に向き合っております。当院は ER が充実し湘南地区の救急医療最後の砦として、症例数とその多彩さは圧倒的であり、若手医師の修練施設として最適な場所と考えます。

藤沢市民病院といえば若手医師が多い印象ですが、最近では指導医も増え、化学療法の安藤先生、IBD の稲垣先生（非常勤）、消化管（ESD）の福地・近藤先生、肝胆膵の西村・長島先生など、大学病院やがんセンターなどを初めとする専門施設で十分な修練と経験を積んだ医師が続々と藤沢市民病院へ集結し、どの分野も充実した指導体制が整いました。

内視鏡関連では ESD は神奈川県内の市中病院としては有数の件数（2022 年度は 240 件）を誇り、若手も多くの症例を経験できます。専門施設と同じ最新鋭内視鏡での全例拡大観察を導入し、大学病院と同様の内視鏡診療のクオリティを目指しています。麻酔科と連携し、毎週全身麻酔下 ESD を行う恵まれた環境もあり、安全で万全な体制での若手指導を行っております。

ERCP 関連では再建腸管に対する小腸鏡を用いた ERCP や EUS-HGS をはじめとした Interventional EUS など難易度の高い症例に対する治療も積極的に行っています。

新たな世代が集結しさらにその次の世代が超えていき、近い将来に《全国区の消化器内科》となることを目標とし、チーム一丸で必ず達成したいと思っております。

ぜひ、皆様と当院でともに熱く働ける日を楽しみにしております。

【済生会横浜市南部病院】  
消化器内科部長・副院長 川名 一郎

済生会横浜市南部病院は横浜南部地域の基幹病院として横浜市が計画設置し済生会が運営しており、急性期病院として専門的、先進的医療、救急医療における地域の中心的役割を果たしています。港南台駅から徒歩 3 分の好立地です。横浜市立大学 2 大学病院とも近く多くの診療科で連携を取って診療を行っています。消化器内科は、2011 年度から当教室の関連施設となり、初年度は 6 人でスタートしましたが、毎年増員され、2021 年度は 14 人体制になりました。（2022 年度は 13 人体制）病床総数は 500 床で消化器内科の病床数は 58 ですが、積極的な救急患者を受け入れており、ほとんどの日で定

数をオーバーして平均 75 人（covid19 後病院全体が 2 割減で消化器内科も 60 人程度）を超える入院患者数です。消化器内科での救急患者の診療は年間 700 人程度ですが、病院全体で年間 9000 台（昨年度は covid19 の影響で少し減少しました。）を超える救急車で来院される患者さんの診療を行っており消化器内科以外の分野の救急診療を学ぶこともできます。腹部血管造影、消化管 ESD、EUSFNA、カプセル内視鏡、小腸内視鏡、など消化器内科として出来ない検査はないくらいで、様々な手技の習得が可能です。上級医が多いのも特徴で、安心の診療を提供しています。また後期研修医のサポート、指導体制がしっかりしていると自負しています。新しい専門医制度において当院は基幹病院となっています。仲間になっていただき一緒に診療しましょう。

**【横浜南共済病院】**  
**消化器内科部長 近藤 正晃**

横浜南共済病院は病床数 565 床、30 に及ぶ診療科をもつ地域の基幹病院です。我々消化器内科は、スタッフ 8 人と専攻医 5 人の 13 人体制で診療にあたっています。診療体制の特徴として、消化管グループと肝胆膵グループの 2 つのグループに分かれて入院診療にあたっていることです。各グループはさらに 2 チームに分かれ、1 チームが上級医と専攻医の 2-3 人で構成されており、各チーム 10-15 人ずつの患者さんを担当しています。よって、専攻医の先生は常に上級医の指導の下、検査・治療を行いながら疾患に対する知識・経験を深めていくことができます。

チームカンファレンスは毎日行っていますが、他に消化器内科全体、内視鏡読影、外科との合同カンファも毎週 1 回行っています。

また研究会・学会へは積極的に参加してもらい、特に専攻医の先生には資格取得条件のこともあります。発表や症例報告などの記載も頑張ってもらいたいと思っています。

当院ではベテランと若手が一体となって日々の診療に向かい合っています。新型コロナに対して、油断は禁物ですが、それほどストレスは感じない日常になり、見学もほぼ制限なく来ていただけるようになってきています。よろしければ、一度見学に来ていただいて、当院の雰囲気を感じてもらえればと思います。

**【横須賀市立市民病院】**  
**消化器内科部長・副病院長 小松 和人**

横須賀市立市民病院は病床数 482 床（感染症病床・回復期リハ病棟・地域包括ケア病棟を含む）です。病院全体では一般病棟は実質 220 床ほどで運用しています。消化器内科としては、25~35 名程が入院しています。消化器内科医師は 2022 年 4 月からは 5 人体制となります（地域医療振興協会の専攻医が抜けるため、1 名減となります）。

当院は、三浦市・横須賀市南西部地区の基幹病院としての役割を担っており、消化器内科としては、1 日 24 時間、365 日体制で、吐下血・胆道系疾患・イレウスなどの緊急治療に対応しています。時間外の緊急内視鏡検査に関しては、内視鏡に慣れた看護師・ME のオンコール体制も整っており、内視鏡の準備・介助・片付けをしていただいています。毎週火曜日及び水曜日の午後には、胆膵の指導医の先生を大学から派遣していただき、胆膵検査・治療の指導に当たっていただいています。

今年度には内視鏡室の移転が行われ、2022年5月中旬には新内視鏡室が稼働します。新内視鏡室の検査台は3台と変わりませんが、広さは従来の内視鏡室の約1.5倍になります。内視鏡の前処置室・リカバリー室・待合室などが一つの内視鏡区画にまとまるため、患者さんの入れ替え・介助もスムーズに行われ、検査件数の増加が見込まれます。当院は、検査科・薬剤師・放射線科・ME・リハビリ・連携室・事務職員との関係も良好で、ストレスなく非常に働きやすい環境になっています。伸び伸びと診療に当たり、かつ実力をつけていきたいと考えている人には最適の病院と思っています。

【神奈川県立足柄上病院】  
消化器内科副院長 加藤 佳央  
消化器内科部長 國司 洋佑

当院は、神奈川県西部の地域医療を担う中核病院です。当院の内科系は、総合診療科、消化器内科、循環器内科、呼吸器内科、神経内科からなります。総合診療科は県下で有数の実績を持ち、**内科専門医研修プログラム**では総合診療科とタイアップして研修することで多数の症例を効率的に経験すると同時に、エビデンスを重視したレベルの高い指導が受けられます。消化器内科医を志しているものの、**内科医としても基盤をしっかりと固めたいと考えている方は**当院での研修を是非ご検討ください。

消化器内科は、消化管疾患・肝胆膵疾患いずれにおいても、地域唯一の医療機関として、common diseaseから専門領域までをカバーしているため幅広い症例を経験でき、消化器の基本技能の習得が可能です。検査や治療の手技に関しては**高い敷居を設けておらず**、やる気があり勉強してくれば積極的に術者として経験を積めます。多くの後期研修医は2年目が終わる時点で上下部消化管内視鏡のスクリーニング検査に加え、大腸EMR、ERCPまでは術者としてある程度安定して施行できるようになります。学術指導にも力を入れており、最低年1回は学会発表してもらおうと同時に、希望がある場合は論文作成の指導も行っています。

電車では小田急線新松田駅から徒歩3分、車では東名高速道路大井松田I.C.から5分ほどの立地で交通アクセスは比較的良好です。また箱根温泉が近く、仕事終わりに温泉に行く先生もいます。

これから専門医として高みを目指そうとしている先生方にとって、当院での研修がその後の飛躍に結びつくよう指導いたします。

【大森赤十字病院】  
消化器内科副部長 井田 智則

所在  
東京都大田区中央。  
最寄り駅；JR京浜東北線大森駅よりバスで7分程度（徒歩20～30分）





## 歴史

1953年に日本赤十字社東京都支部が設置する病院としては武蔵野赤十字病院に次いで都内2ヶ所目の病院として開設。  
2012年に新病院オープン。



## 施設

急性期344床, ICU6床, HCU12床

## 消化器内科スタッフ

部長2名  
医員7名（うち1名産休中）  
専攻医5名  
顧問（副院長）1名

当教室派遣2名, 他教室派遣5名, 院内就職8名の混成チーム  
所属の違いを意識することなく診療業務や指導を行なっております。

日本消化器病学会専門医8名（うち指導医3名）  
消化器内視鏡学会専門医8名（うち指導医4名）  
肝臓学会専門医5名（うち指導医1名）  
日本超音波医学会認定専門医・指導医1名



## 診療内容

消化管内視鏡診療（食道，胃，十二指腸，大腸 ESD 等）  
胃 SMT に対する腹腔鏡内視鏡合同胃局所切除術（LEGS）  
肝癌診療（ラジオ波焼灼術，化学療法，血管造影等）  
胆膵内視鏡診療（ERCP 関連手技，EUS 等）  
その他消化器内科一般

### 2022年度の主な診療実績

ESD 322件（上部119件，下部203件）  
ERCP 244件  
EUS 190件（FNA 32件）  
RFA 44件

肝癌治療や消化管 ESD に関しては全国レベルの実績があります。

内視鏡診療は週一回の内視鏡カンファレンスと ESD 術前術後のカンファレンスを行っており，レベルの高い内視鏡診療が習得できます。

胆膵領域は ERCP 関連手技を中心に診療しています。EUS intervention の症例は少ないですが，緊急胆道ドレナージや胆膵悪性腫瘍の化学療法など精力的に診療しております。

学会活動や論文執筆の実績が豊富な医師が多く，アドバイスできる環境が整っております。意欲と熱意さえあればその分野のエキスパートがしっかりと指導します。当直や救急当番は大変かもしれませんが，個性豊かなスタッフと一緒にたくさんの症例を勉強して頂ければと思います。

## 【大和市立病院】

### 消化器内科医長 亀田 亮

大和市立病院は横浜市の隣、大和市中核をなす 403 床の総合病院です。最寄り駅は小田急線の鶴間駅（徒歩 10 分ほど）ないしは相鉄線の大和駅（バスがありますが徒歩で 25 分ほど）になります。東名・保土ヶ谷バイパスの横浜町田 IC から近く、横浜・東京都心へのアクセスも良好です。

公立病院で、身分は大和市職員になります。時間外手当がきちんと出るので、給料も比較的良好です。

消化器内科スタッフは現在 6 名で、うち 3 名（後期研修医 2 名）が横浜市大消化器内科学教室からの派遣になります。出身母体はバラバラですが、科内の仲はよく、和気あいあいと助け合って診療を行っています。お互いにフォローしあっているので、休みも取りやすいです。他科、多職種との連携も良好です。多くの科が横浜市大の医局からの派遣になります。これまで勤務された先生からは働きやすい職場との御評価を頂いています。

急性期病院ですので、救急疾患は豊富です。3 名ががんセンター出身ですので、癌診療も積極的に行っています。ESD(食道・胃・大腸 3 臓器で年間 100 件を越えています)・ERCP・PTCD・RFA・各種ステント留置などの手技や抗癌剤治療(食道癌・胃癌・大腸癌・膵臓癌・胆道癌など)・放射線治療なども積極的におこなっています。各人の習熟度を見ながらですが、なるべく積極的に手技も経験してもらっています。

是非、大和市立病院に来て下さい。一緒に楽しく仕事をしましょう。

#### 【秦野赤十字病院】

#### 第二消化器内科部長 三浦 雄輝

秦野赤十字病院は、秦野市内秦野盆地の南高台上に位置する日本赤十字社神奈川県支部が運営する、中規模の総合病院です。地上 7 階地下 1 階の本館と地上 3 階の新棟からなり、320 床の一般病床を有します。最寄り駅の小田急小田原線秦野駅からは徒歩 18 分、バスだと 9 分かかります。東名高速道路の秦野中井 IC からほど近く、横浜まで車で 49 分とまずまずのアクセスです。

平成 29 年 1 月、院長として田中克明先生が赴任して以降、秦野市のフラッグシップ病院として、救急科を新設し秦野市救急ワークステーションを開設するなど急性期医療に積極的に取り組んでいます。神奈川県災害医療拠点病院として指定を受けていることに加え、救護班、DMAT の活動や災害訓練など、日本赤十字社の理念に基づいた災害救護活動を行っていることも大きな特徴です。平成 23 年の東日本大震災以降では、平成 27 年の関東・東北豪雨、平成 28 年の熊本地震、令和元年の台風 15 号災害の際に当院からも救護班を派遣しました。令和 2 年からは新型コロナウイルス感染症患者の入院受け入れや発熱外来の運用、ワクチンの接種など、秦野市の重点医療機関協力病院としての責任を果たしました。

消化器内科は、田中院長は肝臓、三浦は胆膵、榊原医師は消化管領域を専門としながら、後期研修医 1 名とともに消化器疾患全般を広く診療しています。そのほか横浜市大と東海大から非常勤医師の派遣、指導を受けています。令和元年 10 月には「消化器病センター」を開設し、外科とカンファレンスなどを通じて緊密で質の高い連携を目指しています。現在外科には 2 人の日本内視鏡外科学会技術認定医が在籍しており、協働して LECS(腹腔鏡内視鏡合同手術)を行うなど、協力体制を築いています。

後期研修については、1 年目は上部内視鏡 300 件以上、2 年目は下部内視鏡 180 件以上を目標にしています。2 年目からは ERCP の術者となります。また、血管造影は東海大学の放射線科医から直接指導をうけることが出来ますし、生理検査技師の下でエコーの勉強も可能です。2 年目からは研修日があり、大学病院での研修など、次のキャリアステップを見据えるための活動もサポートしています。

一方、内科の新専門医制度に対応して他内科(循環器、腎・高血圧、神経、代謝内分泌)の症例を受け持ち、各々の専門医から指導を受けられます。

また、健診センターを併設しており、ドックの内視鏡検査や検診を多数行っていることも特徴です。第一消化器内科部長の池田彰彦先生がセンター長も兼任されており、疾患の早期発見・治療に寄与しています。

規模が大きい病院ではないため、医師の人数も少なく症例数も限られていますが、消化器領域の症例数は増え続けており、一人当たりの検査件数も多いです。若手の医師には早い時期から術者などの重要な役割を担っていただいております、困ったときはいつでもサポートができるよう体制を整えています。また、個々の意見や要望が反映されやすく、自らは貴重な戦力である、という自負のもと働ける環境であると思います。

### 【横浜保土ヶ谷中央病院】 消化器内科部長 桑島 拓史

#### 【病院の紹介】

横浜保土ヶ谷中央病院は、横浜市保土ヶ谷区の小高い丘の上の緑豊かな自然に恵まれた病床数 236 床の中規模病院です。

船員保険病院として昭和 30 年に開設され、平成 26 年に独立行政法人地域医療推進機構 (JCHO) 横浜保土ヶ谷中央病院と改称いたしました。

横浜駅からバスで 20 分、相鉄線上星川駅から徒歩 15 分のところに位置し、車では第三京浜常盤台 IC から 5 分、保土ヶ谷バイパス新桜ヶ丘 IC から 7 分とアクセスは比較的良好です。

#### 【消化器内科の特徴】

消化器内科のスタッフは 5 名 (うち専攻医 1 名) で、比較的若い医師が多いものの、大学病院や県立がんセンター、大規模中核病院で研鑽を積んだ医師で構成されており、それぞれの得意分野を活かしながら生き生きと診療にあたっております。

地域に密着した市中病院であるため、消化器疾患に加えて、新専門医制度で必要となる一般内科疾患も多く経験できます。また、他科との垣根が低く気軽にコンサルトできる環境が全体に出来ております。

担当する入院患者様は医師 1 人当たり 5-8 名程度で、定期的カンファレンスを行い、学年を越えて忌憚なく意見を出し合いながら治療方針を検討しております。

2022 年度の内視鏡件数は、上部 2417 件、下部 (EMR/CSP 含) 1043 件、ERCP91 件、ESD58 件 (食道 7 件、胃 38 件、大腸 13 件)、胃 LECS1 件でした。なるべく若手の先生方のトレーニングを優先しつつ、上級医がしっかりとフォローできるように体制を整えております。

ESD と ERCP は中核病院である横浜南共済病院と済生会横浜市南部病院から指導医を週 1 コマずつ派遣していただいております、専門的なトレーニングを受ける環境も整っております。

ひとりひとりの希望する働き方を尊重し、お互いが協力しあいながら診療にあたる雰囲気醸成されております。また、夏休みはもちろん、その他の時期にも有給休暇の取得を推奨しており、リフレッシュすることができます。

当院で専攻医をスタートして内科疾患や消化器疾患、内視鏡の基本を一通り学び、その後大学病院や中核病院で専門性を高めていく方法もあります。

皆様と一緒に働くことを楽しみにしております。

**【横浜掖済会病院】**  
**病院長 内藤 実**

当院は1986年（明治29年）創立の病院です。元来は船員の方のための病院でしたが、現在は地域の住民の方々のための病院としての役割を務めています。

病床数は151床（3病棟）でそのうちの1病棟を内科が担当しています。診療科は他に外科と整形外科と眼科があり、麻酔科も含めてすべての科が横浜市大の関連施設となっています。

内科常勤医は消化器内科4名、血液内科1名、呼吸器内科1名の計6名です。他に循環器内科と脳神経内科の非常勤医師による専門外来があります。

消化器内科の検査・処置としては上部・下部消化管内視鏡検査、EMR・ポリペクトミー、EVL・EIS、ERCP・EST・EPBDなどを行っています。

市民総合医療センターと距離的に近いので、病病連携や若手Drの研修先として同センターと緊密な関係にあります。

規模が他の関連病院と比較して小さい病院ですがその分個人の裁量が利くため症例数はいくらかでも増やせます。また小規模ゆえに病院内の他の部署と横のつながりも良好です。大病院とは一味違った経験を一度してみてください。

**【神奈川県立がんセンター】**  
**消化器内科 肝胆膵 部長 上野 誠**  
**消化器内科 消化管 部長 町田 望**

県内唯一の「がん診療連携拠点病院」として平成25年には新病院が開院し、がん治療に特化した医療を行っています。消化管グループと肝胆膵グループに分かれますが、専門上級医の指導のもと充実した研修をお約束します。

消化器内科医としてがん診療の基礎を勉強したい先生、今後がん診療・緩和医療を専門に行っていきたいと考える先生、2～3年間のローテートとして当施設での専門研修をぜひお考え下さい。

当院の研修では…

■ **消化器がんの全ステージを多数例経験**

今後皆さんが実臨床で遭遇するがん症例は「早期」だけでなく、むしろ「進行期」や「ターミナル期」であることも少なくありません。当院ではあらゆるステージにおける最適・最新の治療法について学ぶことができます。年間症例数はRFA 57件、TACE 118件、新規化学療法導入 20-30件（肝がん）・450件（胆膵がん）、ERCP 総数 957件、EUS/EUS-FNA 総数 554件です。また、消化管領域では上部ESD 250件超、大腸ESD 50件、新規化学療法導入 150件です。

■ **臨床試験や多施設共同研究に多数参画**

新薬の臨床試験では今後主流となりそうな分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤の使い方を上級医の指導のもと経験できます。

■ **研究論文作成のお手伝い**

学位取得を考えている皆さんは、ぜひ消化器内科学教室大学院の受験をお勧めします。当院では論文の基礎となるデータ整理や論文化のサポートをいたします。

■ **専門医取得**

内科学会教育関連施設、消化器病学会・消化器内視鏡学会・肝臓学会・臨床腫瘍学

会等の各指導施設です。また、臨床腫瘍学会の「がん薬物療法専門医」の取得もローテーション中にサポートします。

\* 職種には常勤医、任期付常勤医（最大3年まで）、レジデント（2～3年）がありますが、待遇は卒年で決まるため給与体系は同一です（3～10年目までの若い医師でもアルバイト無しで十分可能な給与待遇です）。

**【東京高輪病院】**  
**消化器内科 三箇 克幸**

当院は品川駅から徒歩10分、高輪台駅から徒歩3分の都心にあり、周辺は都内でも有数の高級住宅街です。病院の目の前には学会が頻繁に開催されるグランドプリンスホテル新高輪があり、気軽に学会に参加することができます。

当院の病床数は約200床で横浜市立大学からの派遣は消化器内科のみです。他科の派遣先は東京大学、昭和大学、東邦大学、国立国際医療センター等に加えて、病院の独自採用と多様性に富んでいます。そういった背景から当院の長所は中規模病院ならではの垣根の低さと小回りが効くこと、多様な価値観が尊重される風土であると考えております。消化器内科は4名で構成されており、内訳は当教室からの派遣が2名、その他に東京大学と独自採用の医師が1名ずつ在籍しています。ESD等の消化管関連の処置に関しては東京大学消化器内科出身の近隣開業医の応援を受けています。ERCPやEUS等の胆膵関連の処置に関しては専門医が2名在籍していることから指導体制は整っております。また癌研有明病院肝胆膵内科部長の応援を毎週受けしており、難症例に対する内視鏡治療も行っています。今後は小腸内視鏡も導入予定です。

内科専攻医の先生には他施設と同様に外来や救急、病棟業務と並行して、各種内視鏡検査やPTGBD等の経皮処置といった消化器内科医としての基本的なスキルの習得を目指し、私共がサポートを行っていきたいと考えております。

当科スタッフの平均時間外勤務時間は月に5～10時間程度と少なく、有給休暇の積極的な取得も推奨されております。メリハリのある研修環境であることから、消化器内科領域の座学を学ぶ時間は十分に確保でき、更に出産や育児、内科専門医レポートの作成等とも両立しやすいことも特徴の一つです。給与は他施設と比較すると同程度ないしそれ以上に設定されており、福利厚生も比較的充実しています。

多様な活躍の場が用意されておりますので、ご興味を持っていただいた方であればどなたでも大歓迎です。当院で基本的なスキルを身につけた後に、専門性を磨きたい方、ライフワークバランスを重視したい方、指導医として活躍したい方など、個人の希望に応じて柔軟に対応する方法を模索していけると思いますので、ぜひお声をおかけ下さい。

**【川崎市立井田病院】**  
**消化器内科 山田 博昭**

当院は川崎市中原区に位置する病床数383床の地域基幹病院です。平成27年に新病棟が開院されたばかりであり病院は新しく、日吉駅からバスで5分ほどの位置にあるためアクセスは比較的良好です。当院の全体的な特徴として、緩和ケア病棟を有するなど地域がん診療拠点病院としてがん診療に力を入れている他、結核病棟があるなど感染症診療

においても充実した体制を構築しております。一方で、地域包括ケア病棟をもつなど回復期医療にも重点を置いていることも特徴といえます。

当院は 2023 年度より当教室の関連施設となりました。2023 年 4 月現在、消化器内科医師は 8 名(専攻医 4 名含む)であり、当教室からは 2 名(専攻医 1 名)が派遣されています。当教室以外からも、当院プログラムや他大学のプログラムにより毎年多くの専攻医の先生がローテートしております。専攻医の先生は common disease から、癌に対する全身化学療法や緩和医療、内視鏡治療症例まで、多彩な症例を学ぶことができると思います。消化器疾患以外の一般内科疾患も多く経験できるため、新専門医制度で必要となる症例も多く経験できると思います。また、中規模病院ならではの特徴ですが、各科の垣根が低く、他科との連携が非常にスムーズです。さらに緩和ケア科常勤医師が多く、終末期癌医療における疼痛コントロールなどを直接学べる機会も多いのも強みです。検査・手技面では我々は上下部内視鏡をはじめ、ESD、ERCP、PTGBD、肝生検などの処置を中心に行なっております。吐下血や胆道系疾患に対する緊急処置を行う機会も多く、その場合は上級医の指導のもと若手の先生にできる限り施行していただくようにしております。さらに腹部血管造影については慶應大学病院の放射線科医師から直接指導を受けることができ、臨床検査技師の元で直接超音波検査の指導を受けることが可能です。また福利厚生も非常に充実しており、それぞれの希望する働き方に応じて柔軟に対応していくことが可能です。このように専攻医の先生に対する指導体制やサポート体制は非常に充実していると自負しておりますので、ご興味があれば是非見学にいらしてください。

## 12. 先輩医師からのメッセージ

### ① 理化学研究所 先端医化学研究センター(留学中) 谷口 勝城 (平成29年卒)

2017 年 横浜市立大学卒の谷口勝城(やぐちかつき)です。自分が当教室への入局を決めた理由は、自分の生涯をかけたテーマとして、炎症性腸疾患(IBD)に関わる仕事に携わりたいと考えたからです。僕自身、15 歳の頃にクローン病と診断され、3 ヶ月以上の入院生活を経験しました。将来 IBD を治す医師になりたいと思い、医学部へ進学しました。当教室には国内最大規模の IBD センターがあり、医学部在学中から前田教授、国崎先生にお世話になっていたこともあり、迷うことなく当教室へ入局を決意しました。その後、臨床医として IBD 診療に携わってきましたが、臨床研究だけでは IBD を根治することはできないと痛感し、現在は大学院生として理化学研究所へ国内留学させていただき、腸内細菌と炎症性疾患の関連性について研究を行っています。

皆さんはどんな医師になりたいと思い、医師を志しましたか?中には海外留学を志す人もいれば、基礎研究をやりたい人、最先端の医療に興味がある人や地域診療に惹かれる人もいたり、皆さんの叶えたい夢は異なることと思います。簡単に叶わないからこそ“夢”であり、挑戦し続ける価値があります。その過程では様々な困難を経験しますし、難しい選択を乗り越えていく必要があります。上手くいくこともいかないこともありますが、医局の存在は常に自身の挑戦の支えになります。どんな選択・挑戦をしようと誰かが必ず理解してくれ、応援し、力を貸してくれる環境はそう多くありません。たとえ大きな壁にぶち当たったとしても、多くのサポートをしてくれます。僕自身が臨床を離れる際にも多くの先生方が応援してくださり、こうして今現在も夢への挑戦を続けることができています。是非みなさんにも当教室でさまざまな経験をし、理想の医師に近づくための努力を続けていただくと非常に嬉しく思います。長くなりましたが、一人で

も多くの先生と一緒に働ける日が来ることを期待します。

② 横浜南共済病院勤務 石原 鴻（令和2年卒、専攻医2年目）

私は杏林大学医学部卒業後、大森赤十字病院で1年、横浜市立大学附属病院で1年、初期研修医を行い、横浜市立大学消化器内科学教室へ入局しました。

卒業した自大学への入局も考えていましたが、当教室で研修を回った際の居心地のよさ、雰囲気よさに惹かれ当教室の入局を決めました。一緒に仕事をするなら、学ぶならここがいいと思える先生方がたくさんいらっしゃいます。

現在は専攻医として横浜南共済病院で研修させていただいております。

当院ではチーム制を敷いているため、主治医として担当する患者を多数抱えながらも上級医の温かく的確なサポートを受けることができます。

また、内視鏡処置や関連症例も多く、入局1年目で出血対応、ERCP、PTGBD、胃瘻造設など多岐にわたる処置を経験させていただきました。初めての手技も上級医の指導のもと行わせていただき、緊張がありながらも安心して経験を積むことができいております。指導の手厚さとやさしさ、学びはピカイチだと思います。若輩で迷惑をかけてばかりですが、感謝しかありません。本当にいい病院、医局です。

こうした環境で皆様とご一緒できることを楽しみにしています。少しでも消化器内科に興味があれば、是非一度消化器内科教室に見学に来て、実際に雰囲気を感じてください。

③ 国立がんセンター中央病院（留学中） 善浪 佑理（平成29年卒）

私は島根大学を卒業後、センター病院で初期研修を行い消化器内科学教室へ入局しました。その後は横須賀市立市民病院で2年間研修をした後に附属病院とセンター病院に半年ずつ勤務させていただきました。専攻医の3年間が終わって思うことは、私は消化器内科医になって、またこの医局に入局して大正解だったということです。横須賀市民病院では消化器疾患だけでなく、一般内科としての診療も多く経験しました。初めての主治医、初めての外来、初めての書類仕事など、わからないことだらけでしたが沢山の指導を頂き医師としても、人としても成長できた2年間だったと感じています。そして3年目の附属病院とセンター病院での勤務は、自分の未熟さを痛感する毎日でした。各分野のspecialistの先生方の診療を間近で拝見し、自分のアセスメントの浅さや処置の下手さに嫌になりそうでしたが、上級医の先生方の温かい励まし・ご指導のおかげで、多くのことを楽しみながら学ぶことができました。

私はこの医局の強みは「人」だと思っています。いつも温かく、時に厳しくご指導くださる（でも飲み会では楽しく！）先輩、他愛もない話も真面目な話もできる同期、病院が変わっても飲みに誘ってくれる後輩。3年間で出会えた人との縁は人生の宝物と言っても過言ではありません。そんな人達に囲まれて伸び伸びと研修をさせて頂き、自分なりに悩みましたが今後は化学療法を専門にしていきたいと思うようになりました。お忙しい中面談の時間を作ってください、国立がん研究センター中央病院へ勉強に出してくださった前田教授には感謝申し上げます。さらに「辛かったら戻っておいで」と声をかけて下さり肩の力が抜けたのを覚えています。ですが3年間しっかりと研鑽を積み、横



浜に帰ってこられるよう精進させていただきます。

最後に研修医の先生方にお伝えしたいことは、社会に出れば色々な人がいますし、いいことばかりではありません。ですがそんなときに頼れる仲間がここにはいます。大丈夫です。

少しでも興味が湧いた方はぜひ一度教室見学へ出かけてみてください。どこかでお会いできることを楽しみにしております！

#### ④ 横浜市南部病院勤務 小俣 亜梨沙（平成31年卒、専攻医3年目）

私は横浜市立大学を卒業後、初期研修を藤沢市民病院で行い、当教室へ入局しました。消化器内科の中での専門分野は決めていなかったのですが、どの分野も充実している当教室へ入局を決めました。後期研修 1-2 年目を藤沢市民病院で行い、現在は済生会横浜市南部病院で勤務しております。

藤沢市民病院では充実した救命救急センター・他科、コメディカルの方々のフットワークの軽さにより、患者さんに関わる皆で一丸となって診療にあたることができました。主治医＋チーム制であり、主治医・処置の術者としての責任を自覚しながら、上級医への相談もしやすい環境でした。早くから専門とする分野をどこにするか考える機会も頂きました。

胆膵疾患の診療をより深く学ぶため、済生会横浜市南部病院への異動を叶えて頂きましたが、充実した日々になる予感がしています。

これまでお世話になった上級医の先生方にはそれぞれ魅力があり、目標にしたい先生方ばかりです。また同期や学年の近い先輩後輩が努力家であり、共に励むことができています。専門家として一人前になるまでの道のりは果てしないですが、当教室でなら頑張っていけると思っています。

是非一度見学にお越しください。皆様と一緒に働ける日を楽しみにしております。

#### ⑤ 藤沢市民病院勤務 安藤 知子（平成18年卒）

私は横浜市大での臨床研修を終了後、約3年間藤沢市民病院に勤務しました。

藤沢市民病院は藤沢市の中核病院であり、非常に症例も豊富です。私はこの3年間で様々な症例を経験し、消化器内科医としての考え方、技術などをたたき込んで頂きました。3年間で学んだことは消化器内科医として、医師として基板となっていると感じています。また上司には常日頃、自分の武器を見つけろと言われ、幸いにも日常診療を行って行く中で、私は自然と癌治療に興味を持つようになりました。そのような経緯もあり、その後の2年間は神奈川県立がんセンター肝胆膵内科で働く機会を頂きました。

ここでは市中病院で経験出来ないような、癌の最先端の治療等を学ぶ事が出来ました。しかし、学んだ事を市中病院で活かしたいとの思いが強く、その後再度藤沢市民病院へ戻り現在に至ります。私は、消化器内科医5年目の時に結婚し、8年目の時に長女、10年目の時に次女を出産しました。

この間、家族・同僚の協力を得ながら、また日当直・オンコール等の調整を行うなどしながら、現在に至るまで急性期病院である藤沢市民病院で常勤医として勤務を続けてきました。女性医師は結婚、妊娠、出産を契機に働き方を変えざる終えない時期があります。もちろん一時子育てに専念するということがあってもいいと思います。色々な考え方があると思いますが、結婚・出産＝一線を退かなくては医師を続けられないというこ

とは無いと思います。子育てと常勤医を両立することは確かに大変かもしれませんが、小さい頃から子供を保育園に預けることになり、寂しい思いや、体力的に負担をかけてしまうかもしれません。

先日長女の保育園の卒園式で、長女に「小さいころから一緒にいてくれてありがとう」と声をかけてもらいました。次女は5歳になりましたが、大きくなったら病院の人になる！と言ってくれます。私は、自身のキャリアを優先することで、子供達に迷惑をかけてしまっていると負い目を感じている部分がありましたが、これをきっかけに続けてきて良かった。子供達は子供達なりに、自分が頑張っているのを分かってくれていたのかなと感じました。

子供は確実に親離れしていきます。母親には母親の人生があります。やりたい事を追求することは決して悪いことではありません。もし子育てしながら第一線で働きたいと考えている方がおられれば是非一緒に働きましょう。みなさんとお会い出来ることの楽しみにお待ちしております。

### 13. 後期研修中もしくは終了後に入門した医師からのメッセージ

#### ① 横浜市立大学附属病院勤務 松林 真央 (平成21年卒)

私は順天堂大学を卒業し、神奈川県急性期病院で初期研修を終了しました。初期研修終了の際には消化器内科あるいは消化器外科のいずれに専門を絞るか決めきれずいたため、入門を見送りました。そこで、初期研修を終了した施設で、後期研修医として市中病院で内科医としても外科医としても研鑽を積むことを選択しました。

後期研修の1年間は、自身の適正や学問的興味の方向性と向き合うことができた大変実りの多いものでした。その中で、消化器疾患の奥深さや多様性に触れるうち、特に炎症性腸疾患の診療に興味を持つようになり、さらに学び先進治療に触れたいと思うようになりました。

多くの医局の中で当教室に入門した理由は、三点あります。一つめは地元である横浜で生きるための将来設計の一環として、二つめはIBDセンターを有していたこと、三つめは多くの関連病院を有し多様な後期研修教育を受けられることです。

入局後は、センター病院と足柄上病院で後期研修を修了したのち、足柄上病院で一般消化器診療に携わりながら、IBDセンターや神奈川県立がんセンターに定期的に勉強しに行かせていただく機会を頂きました。やがて、多くの先生の指導により刺激を受けるうちに、診療だけでなく医学研究に興味を持つようになり、大学院に進学しました。北里研究所病院の炎症性腸疾患先進治療センターに国内留学し、専門診療を学び臨床研究に携わらせていただきました。現在は、附属病院に勤務し、臨床研究や後進の育成に携わっていきたいと考えています。

というのは、表向きの話。我が医局員は変な人も楽しい人も沢山いて、見ていて飽きません。様々な大学から人が集まるためバックグラウンドが多種多様で、それだけでも異文化交流です。教授に恋愛相談をはじめ人生相談ができる医局は他にはなかなか無いようです。

もちろん、働くことは楽しいことばかりではなく、嫌なことも辛いことも大なり小なりあるでしょう。大人ですから。そんな時に、私は医局の仲間たちに支えられています。多分、たまには支えたりもしています。

そんな親しみやすい当教室に、消化器内科医を志す皆様をお迎えできることを楽しみに

しています。

## ② 横浜市立大学附属市民総合医療センター勤務 西尾 匡史 (平成 22 年卒)

私は山口大学を卒業し、千葉県・神奈川県 of 急性期病院で初期研修・後期研修を終えました。

入局をせずに市中病院で勤務する選択肢もありましたが、消化器内科医として専門性を高めたいという思いがあり、医師 6 年目で当教室に入りました。

数ある医局の中で当教室に入りました理由は、私の目標を応援してくれる医局であると思ったからです。

私の目標は、消化管疾患の専門的治療ができる医師になるということでした。もともと早期癌に対する内視鏡治療（内視鏡的粘膜下層剥離術：ESD）をやりたいという思いがあり消化器内科医になりましたが、それに加え、後期研修の中で、炎症性腸疾患（IBD）の診療の重要性も実感し、ESD だけでなく IBD も学びたいと思うようになりました。

当教室の市民総合医療センターは、日本でも有数の ESD と IBD の症例数を誇る施設であり、この施設で研修をしたいと強く思いました。入局前に、前田慎教授にその思いをお伝えした際に、「やりたいことは必ずやらせる」という心強いお言葉をもらったことが、この教室に入局する大きな決め手になったことを覚えています。

入局後は、前田教授をはじめ医局長・部長の先生方のご高配もあり、市民総合医療センターの IBD センターで 3 年間勤務した後に、消化管チームに移って ESD の研鑽を積みさせていただいております。その間に大学院にも入学し、臨床・研究と忙しくも非常に充実した生活を送っており、目標に少しずつ近づいていると実感しています。

もちろん、目標や希望は人それぞれですし、やりたいことが見つからないという先生方もおられるかと思いますが、当教室は「やりたいこと」をかなえてくれる、「やりたいこと」を一緒に模索してくれる教室だと思っています。

また、これも重要なことですが、当教室は、入局時期はもちろん、出身大学や研修先は関係なく、非常に居心地のいい教室です。

我々と一緒に当教室、そして神奈川県 of 医療を支えて頂ければ、大変嬉しく思います。

## 14. 国外留学を経験した医師からのメッセージ（留学のすすめ）

### 横浜市立大学附属市民総合医療センター 小林 亮介 (平成20年卒)

現在、横浜市立大学附属市民総合医療センターで勤務している小林亮介と申します。私は 2019 年から 2021 年まで 2 年間、カナダのトロントで海外臨床留学しましたので報告させていただきます。まずはじめに、皆さん留学に関して漠然としたイメージをお持ちかと思いますが、留学は大まかに分けて国外留学、国内留学があり、またそれぞれ臨床留学、基礎研究留学の二つがあります。もちろん学びたい内容によりますが、やはり異文化の世界に飛び込む国外留学のハードルはより高いのではないのでしょうか。さらに臨床留学となると、その国の医師免許の取得が必要な場合が多いです。そのような中、カナダは移民が多く異文化に寛容で、トロント大学の fellowship program も世界から多くの医師を受け入れております。さらにこのプログラムは、臨床に必要な医師免許はそれぞれの出身国の医師免許を用いるため、カナダで医師免許証の取得の必要なく、臨床の場で医療に携わることができます。

私は Therapeutic endoscopy fellow として、St. Michael's Hospital で内視鏡診療を中心に、同期は5人で、それぞれアルゼンチン、チリ、オーストラリア、日本と様々で垣根なく診療に取り組むことができました。私自身、留学前に市民総合医療センターで消化管を中心に勉強してきましたが、カナダではバレット食道焼灼や憩室切開術、全層切除、アカラシアの POEM など自分が経験したことがない医療も多くやっており、他にも胃静脈瘤に対する EUS Coiling や Gastric Outlet Obstruction に対する胃空腸ステントバイパスなどの interventional EUS、ERCP も多く経験することができました。また臨床の合間に論文の執筆もできました。

内視鏡分野においては日本が一番とされている方も多いですが、海外から日本の内視鏡技術は高く見られている一方で、日本も海外から学ぶべき技術や考え方が多くあります。医療界でも国際的な人材が求められる中、海外留学は大変有意義なものになると思います。海外の医療を勉強してみたい方や一般消化器内科を習得してさらなる専門領域を勉強したい方いらっしゃいましたら、ぜひ一度相談ください。



## 15. 病院見学

病院見学を随時受け付けております。希望される先生は、運営委員会事務局（下記連絡先）までご連絡ください。大学病院（附属病院ないしはセンター病院）をご案内致しますが、関連病院の見学も希望される場合は一括して調整致しますので、お気軽にご相談ください。

## 連絡先

横浜市立大学消化器内科学教室 運営委員会事務局

〒236-0004

横浜市金沢区福浦3-9

横浜市立大学附属病院

消化器病内科

2023年度運営委員長

金子 裕明（かねこ ひろあき）

Email : hero5722@yokohama-cu.ac.jp

TEL : 045-787-2800 (代表) MPS 6947

FAX : 045-787-2327 (直通)